

鵜戸神宮：崖と団塊

鵜戸神宮周辺の海岸線には、変わった形の岩や丸石が点在しています。これらは、この地で数百万年前に起きた地質学的イベントの名残です。神社の本殿が鎮座している洞窟を含め、この地域の崖は、硬い砂岩とそれよりも柔らかい泥岩が組み合わさってできています。約 800 万年前に、一部は地震の結果として、砂と泥が層をなして海中に堆積しました。クラゲやナマコなど数えきれないほどの有機体がこれらの層の中に埋まります。この砂と泥が時間をかけて固まって岩となり、現在、鵜戸の海岸で広くみられる黄色っぽい岩を作り出したのです。海水に含まれるカルシウムが有機体の死骸の周りのまだ柔らかい沈殿物を固め、団塊と呼ばれる丸石を形成し、これが崖の側面のあちこちに突き出しています。地盤の上昇に伴い、団塊が点在する崖が海中から現れます。鵜戸神宮の洞窟は、数百万年以上も岩を打ち砕いてきた波によって削られ、洞窟—自然が生み出した傑作—が、やがて神の住むところとして崇拝されるようになったのです。